



1981年(昭和56年)
12月号(No. 438)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

- チヨモランマ登山隊
公式報告書出版記念会……………(1)
日本山岳会の英文表記
山崎安治……………(2)
自然保護講演会……………(2)
「ヨーロッパの自然保護」
講師 井手貴夫氏
マッターホルン連続二回登頂
脇坂順一……………(3)
図書紹介……………(4)
「図説百科 山岳の世界」「東京大学公開
講座 山」「アッシュの杖」「ヒマラヤ
の賦」
東西南北……………(4)
報告……………(6)
岐阜支部・熊本支部・集会委員会
婦人懇談会・図書委員会
追悼 大木さんを憶う……………(8)
お知らせ……………(9)(11)
図書委員会・高所登山委員会
会務報告・ルーム日誌・会員移動……………(9)
図書受入報告 図書委員会……………(10)

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

▶正月休み 12月29日～1月6日

公式報告書出版記念会

チヨモランマ登山隊

去る十一月十四日(土)午後六時より四ツ谷麹町の食糧会館において、本会のチヨモランマ登山隊の公式報告書出版記念会が開かれた。会場には当時の隊員を始め、この報告書作成を担当した講談社の浜田氏、読売新聞社、日本テレビ、日山協、そして最近チヨモランマ登山をモチーフとして合唱組曲を発表したダーク・ダックスの人々など大勢が集り盛会であった。

会にはチヨモランマ北壁隊のチーミリーダーで、本会の常務理事神崎忠男会員の司会で進められた。

まず西堀総隊長に代り渡辺兵力隊長が挨拶に立ち、一年以内に必ず予定だった公式報告書が、関係者の努力でやっと出版される運びとなり、チヨモランマ隊は社会的

にも最終の義務を果たすことができた、とほっとした気持ちを述べ、続いて立った当時の副隊長で北壁隊隊長の宮下秀樹会員は、会報などで発表した出版記念会の日時までに本が間に合いそうにない、と後で知らされあわてたこと、しかしこの日、参会者だけには何とか百部の間に間に合せて、かろうじてお詫びの芸をせずに済んだことなど、その苦労の一端を披露した。

この後、読売新聞社の星野運動部長は、公式報告書を見て、当時の興奮が目の当りにできる、とその出版を祝い、今井田日山協会長は、今度中国側からK2に登ることになった日山協隊にとっても、本会のチヨモランマ登山の成功は大変励みにもなり参考にもなる、

と今回のチヨモランマ登山を改めて高く評価する祝辞があった。

またダーク・ダックスの人は、

「このような集りに、まったく場違いで、軟弱な歌うたいが現れ驚かれたことと思う」と皆を笑せた後、今までの山の歌も歌ってきたが、結成三十年の記念リサイタルには、今までの美しいロマンチックな山でなく、厳しい山を歌おうと日本テレビのチヨモランマの番組を見て思ったこと、計らずして画面の主役となった撮る側の岩下、中村両隊員の緊迫したやりとりの映像などを見て作曲された、合唱組曲「燃えよ氷壁——わが生と死のチヨモランマ」が各地で公演され、山に縁のない人々もこの映像と歌に興奮している様子や、新聞などの賛辞を見て自信を強めた、などと作曲された音楽



出版記念会の懇親会で／撮影・松家 晋

を背景にユーモラスに語った。松浦輝夫会員の記念講演(内容は後日会報に掲載予定)では早稲

山をきれいに「三」は持ち帰る

田大学K2登山隊の西面初登攀の様子がスライドを利用して語られた。

ひと通り祝辞、挨拶、記念講演と終って懇親会に入ったが、佐々会長の音頭による乾杯のあと、当日の参会者は夫々新しく出来上がった報告書を片手に、チヨモランマ登山隊の隊員一人一人から署名をもらったりして、歓談を続けた。懇親会の席上、十月初め尾崎隆隊員などとマナスルにアルパインスタイルで登ってきた加藤保男隊員は、マナスル登山の時のベースキャンプで、渡りをするツルの群れを見た、と学界あたりで問題になりそうな話を披露した。

出版記念会は、この後八時まで歓談が続いてお開きとなった。

なお公式報告書の定価は五千四百円で十一月二十一日より正式に発売される予定で、ダーク・ダックスの合唱組曲についてはこの報告書にも一部記載されているが、全部で「わが山に悔いなし」「壁の夢」「さらばとは言わない」「希望の空に」「たった一人でも」「燃えよ氷壁」の六つの部分からなりビデオを見せながら公演する新し

いスタイルのもの。地方公演中で東京での公演は来年の五月とのこと。

(記録・岡沢祐吉)

日本山岳会の英文表記

山崎 安治

最近、日本山岳会の英文の表現について若い人たちの間で問題となつてゐるそうだが、やはり古くしきたりは大切にしたいと思う。それがすでに八十年の歴史を持つ本会の伝統と考えるからである。

最近、日本山岳会の英文の表現について若い人たちの間で問題となつてゐるそうだが、やはり古くしきたりは大切にしたいと思う。それがすでに八十年の歴史を持つ本会の伝統と考えるからである。

本会の英文の表示は「The Japanese Alpine Club」である。これを「The Japan Alpine Club」に変えようというところらしい。航空会社のように戦後新しく出来たものならいざ知らず、日本山岳会はやはり「ザ・ジャパニーズ・アルパイン・クラブ」でなければならぬのである。

ウエストン師の名著「Mountaineering and Exploration in The Japanese Alps」が「The Japan Alps」となったら、全く別の本のような感じになってしまう。

ジャパニーズ・アルプスをジャパニ・アルプスという人は昔からいたと見えるが、ウエストン師はこの相違をはっきりわれわれに教えてくれているのであり、その忠告はすなおに受け入れられ現在に至っているのである。

ウエストン師は山岳第十三年二号(大正八年四月発行)に「Of the Origin of the Term the Japan-

「I should like to point out that the variation of the name sometimes used by Japanese writers in English—“The Japan Alps”—is neither so euphonious nor so much in accordance with the usage of correct English.”

「小生は時に日本人記者たちが英語でその山を『ジャパン・アルプス』と変えて使用していることを指摘しなければならぬ。それはまったく語呂も悪いし、さらに正しい英語の使用法からもまるではずれている」

このウエストン師の指摘はいまもその通りであろう。日本山岳会の伝統は永く守っていきたい。最近のように古いことがやたらに破壊されているいまこそ、それを守らねばならないのである。

自然保護講演会

ヨーロッパの自然保護

講師 井手貢夫氏

自然保護委員会主催による自然保護講演会は、去る十月十二日午後六時三十分からルームにおいて当山岳会員であり、北海道自然保護団体連合の代表者でもある井手貢夫氏を講師に招いて、ヨーロッパの自然保護について語ってもらった。講演の内容は氏によって別記のごとくまとめたので、それによって知ってほしい。講演の終了後それに関係のあるスライドや、氏の研究テーマでもあるヘルマン・ヘッセに関するスライドを観賞して九時過ぎに会を閉じた。

(渡辺正臣)

出席者・順不同 斎藤桂、関塚貞亨、谷口現吉、松沢節夫、山川三千雄、織内信彦、松本恒広、武田満子、国見利夫、近藤緑、大木淑子、中村純二、熊谷明、木名瀬亘、小林茂、渡辺正臣

*

*

自然保護といえはルソーの「自然にかえれ」という言葉が常に合言葉として引合いに出されるが、そのルソーのいう自然とは、私たちが普通に考える日本の自然または人間をも含めた広義の自然とも大分違ったものである。第一ルソーが永く生活し、最も愛した自然は中部フランスの実に恵まれた美しい田園的風土であった。それは嵐など全くない、従って天災などということの全くない、しかも美しい田園という人工と自然がじつによく調和した、そういう意味では一種理想的な生活環境であった。そしてこうした理想的な自然環境の中で育かれた

彼の自然観はじつに理念的、理想的な自然であつて、そこから彼の社会改革論や「エミール」の理想教育論も展開したのである。このような理念的、理想的自然観は、その愛した中部フランスの美しい自然の影響をぬきにしては考えられないことである。そういう意味ではルソーの「自然にかえれ」はすでに今日の環境問題であつたのである。

自然保護運動は、しかし産業革命の最初に起つた英国よりも、矢張りフランスがさきであつた。一八五三年に「フォンテンブローの森」を守ろうとする運動がその最初で、これは法律的に保護された。国立公園ではアメリカの一八七二年の「イエローストーン公園」が最初である。以後ヨーロッパ各国に続々と自然保護団体が生まれた。有名なナショナルトラストは一八九五年に三人の市民、というよりむしろ貴族によって提唱され、美しい自然景観の保護と共に英国の伝統的な由緒ある貴族の邸宅や庭園の保存維持を計った。英国のナショナルトラストの大きな成果はそれが貴族によって提唱され、当時のウエストミンスター公やさらにルイ女王も後ろだてになって議会を動かしたことである。これは日本の自然保護運動がむしろ民間から起つて、苦しい運動を続けているのと非常に対照的である。

ところで自然保護という言葉は非常に曖昧な使用方で、今日ではむしろ生活環境の保全乃至改善という方が実質的であると思うが、しかし私たちが自然というのは人間に対する外界の自然であるが、広義に、あるいはもっと厳密に言えば人間も自然の一部に過ぎない。人間も大自然の一部で、他の自然物と全く同等な立場にある。という考え方はすでにスピノーザや、その哲学に深く共鳴したゲーテなどが、早くから考

マッターホルン連続二回登頂

脇坂 順一

山に登り出してからこれ四十五年になる。よく人から「先生が一番好きな山はどの山ですか」と聞かれるが、私は即座に「マッターホルン」と答えるのを憚らない。この山はスイス・イタリアの国境に連なる山で、そのそり立った姿は学生時代からの憧れであった。最初に私が登ったのは昭和三十六年夏で、ちょうど二十年前になる。アイルランドのダブリンにおける国際外科学会に出席講演のついでに、この山の登攀を試みたのであった。

ところで、初めて麓の町ツェルマットに着いて駅前からこの山を仰いだ途端、その物凄い岩壁に圧倒されてしまい、果たして登れるものかと心配になって来た。駅前のホテルでガイドの斡旋を頼んだところ、ハインリッヒ・タウグワルダーという屈強なガイドを世話してくれた。この山は一八六五年七月に英国のウインパー等によって初登攀されたのであるが、ハインリッヒはその時のガイド、ピーター・タウグワルダー親子の、子供の方の孫に当たり、ツェルマットのガイドの中でもボスの存在であった。彼の優れたガイドのもとに急傾斜の岩壁を攀じ登り、遂にその頂上に立ち得た時の感激は未

だに忘れられない。その岩肌の感触も素晴らしいので遂に病みつきとなり、その後ヨーロッパにおける国際学会に出席の度にこの山に登り続け、第五回目の登頂の際には頂上で還歴を祝ったのであった。これを機にこの山はこれでもう最後にしようと思っていたのであるが、体力の方が衰えぬまま、その二年後に第六登。こうなると欲が出て、七十歳の古稀の祝いもこの頂上で、しかも第十登目に、という夢を抱くようになって、トレーニングを続行して来た。今年は満六十八歳なので今年二回登り、来年もう一回登れば再来年は第十登となる、という訳で八月二十五日第七登、同二十七日第八登を遂にやりとげた。この年令でこの山に一日間を置いて連続二回登頂したことは前代未聞ということで、ツェルマットの町の話となり、些かテレしてしまった。これでどうか第十登目に古稀の祝いをする可能性が出来た訳で嬉しかった。とはいっても、この山は今夏だけでも十六名の遭難があり(その中六名は日本人)、極めて厳しい山ではある。今後トレニングに励み、手足が弱って登れなくなるまで、出来るだけ多くの山々に親しみたいと願っている。

えていたことであるが、こうした考え方は宗教的にはむしろ無神論として排撃されていて、この考えを宗教的に公言したのはアルバート・シュヴァイツァーあたりからである。しかし同じ自然物であっても人間は意識し思考できるということで他の自然物とは非常に相違しているわけだ、自然が人間において初めてその精神的自覚に到達し得たということが出来る。この立場からすれば、人間の行為もまた自然の成行である、今日の環境破壊もまた自然の成行ということになる。ただ、環境破壊が進んで人間生活が健全に営み得なくなれば、当然そこに反省が起ってくるわけで、自然保護運動ということの意味もそこにあるわけである。

ところでヨーロッパの自然保護公園でスイスのエンガディーンの国立公園と、北ドイツのリューネブルガー・ハイデは非常に対照的で興味深い問題を提出する。即ちスイスの国立公園は徹底的に自然の成行に委ねて、いっさいの人間の干渉を排除するのに対して、ドイツのリューネブルガー・ハイデの場合は、すでに開墾されていた土地をも買いもどして、これをハイデにするのである。美観のために道路ぞいに植えた白樺の並木が、白樺の種をばらけて、ハイデが侵蝕されると判かると、すべての白樺を伐りたおすという始末である。この話をしたとき、ある青年が、それは非常に不自然だといったことがあるが、珍しい動植物や美しい風光を護ろうとする努力はそういう意味からいえば誠に不自然なことである。しかし人間の行為も自然の成行という立場からすれば、これもまた甚だ自然なことだ、エンガディーンの場合も、リューネブルガー・ハイデの場合も夫々の立場からなされていることである。そしてヨーロッパでは原始的な自然がもはや殆んど残っていない、という実

情からも自然保護運動が一層切実に人々の関心をひいているのである。それは結局人間も自然の一部であって、原始的自然を失なうことはいわば故郷を失なうことであり、その原始性の中にこそ生命の根源的な活力が見出されると考えられるからである。

しかし自然保護運動の意味の重大さは、わが国では公害と生活環境の悪化によって初めて一般の人々の注目を集めるに至った。それでも人々は経済的利益の前にはこれをあきらめずしにす。生命の危険に常に脅かされている炭鉱でさえ例外ではない。人間というものは、うまいものや好ましいものが目前にあると、例えばそれが体に毒であると分かっていても、下手をすると生命の危険があると知っていても、手を出さずにはいられないものらしい。実際に自然を破壊することがどれだけ人間の将来を暗くするかという具体的なデータを比較検討することは非常に困難なことである。

いずれにしても人口が増加し、文明が進めば、自然が次第に侵蝕されることは火を見るよりも明らかである。その中で自然のバランスを守り、人間が健全な生活を営み得る生活環境を保持し、さらにこれを改善して行くにはどうしたらよいか。人々が原始的な生活へ逆もどりできない以上、私たちは何とかしてそこに調和を見出さなくてはならないのである。

もっとも、あと二百年もすると地下資源が掘り尽くされて、中でも鉄が全くななくなるといふ。それに代わる発明が発見でもあればともかく、下手をすると機械文明が崩壊するかも知れない。その時には裸体運動や菜食主義者など、原始的生活を営もうとする人たちの新しい文化の時代が生れるのかも知れない。

(五十六・二十五)

自然保護講演会



三水会だより

恒例上高地山研

現地集会

去る九月十一日三十人分の食事の用意をするため、前日より休暇をとり、千葉保之氏の愛車で池袋を正午出発。天候は甚だ芳しくない。上高地は他の山々と違うのか、滞在していると一回は雨に遭う。例により上高地は車規制で制限時間を割ること七分、鍋や食糧を積み込んでいるのが証しとなつて、情状酌量？ 通行許可となつた。

山研二十時三十分着、津村夫妻を驚かしたことはもちろん、当夜はわれら二人のみ、小さい軀を大きく伸ばして休めた。夜半より大雨、起床七時小雨。

十時二十分ごろ斎藤(健)、高田氏等一行着、嘉門次小屋の若き当主輝夫氏の好意で、バスターミナルに着いた食糧を沼倉、小林、斎藤、小野、高田氏等とともに運ぶ。帰り際に河童橋の中央で聞き覚えの声に振り返ると、退院され

て間もない網倉大先輩が知人と会話中。大分スマートになられたようだ。

アルパインクラブ

蔵書目録発売

イギリスの山岳書専門店「ガストン」より当委員会宛にアルパインクラブの蔵書目録が発売されると連絡がありました。一八九九年刊行のものに増加分を加え六百ページ、邦貨で約二万五千元。希望者は当委員会宛ハガキにて一月十日まで申し込んで下さい、まとめて注文いたします。

(図書委員会)

昼食後、輝夫氏の手で千葉氏と昨年建て替えた嘉門次小屋の屋内を案内してもらう。車また山研に。途中坂倉氏一行とすれ違う。総勢三十人。

勝田、荒野、宇津の当番で夕食準備。他の会員も快く自然発生的に手伝って頂く中に、輝夫氏も料理の仲間に入っている。おでんの郷愁漂う匂いが山研の屋内に満ち、宴を始めるころ、葉湯組はもうご機嫌で赤い顔が何人か。

越後の片岡氏持参の米ワイン、高価なカラスミも出る。鳥居氏寄贈のニガウリの三杯酢、坂倉氏一

図書

紹介



図説百科

山岳の世界

アルベルト・パウムガルト
ナーほか著
西堀栄三郎、宮下啓三監修

一九七七年、スイスのC・J・ブッヘル書店から出版された原本の忠実な日本語版である。本書の特色は美事な写真版と説明図を豊富に用い、山岳の生成、その魅力や驚異、生活とのかかわり等山岳のあらゆる側面を、多角的に解説している点にある。写真の原フィルムを出版元から借り受け、優秀な印刷技術によって再現しているから、ページを繰る度に圧倒されるような山岳風景に接することができる。

それだけでも読者自身が山中に彷徨しているような満足を感じる程である。最近「ペランのパノラマ」など山の豪華本の出版が目立つが、多彩にして手堅い科学的解説を主とし、文学的解説をも含んでいる点で、本書は傑出した内容をもっている。

著者には登山家のヒーベラー(山岳作家)、ディーレンファース(数々のヒマラヤ遠征隊長)が加わり、ヒーベラーが「山岳の自然災害」の章、「山岳観光」の節を担当し、ディーレンファースが「山岳と神話」、「ネパールの山岳文化」などの節を書く。しかし他の主要部分は地理学者や地学者の筆に成る。全編は七章から成り、「世界の山々」(シュワイツァー)、「山岳の生成と消滅」(ハイエルリ)、「山岳の気象」(パウムガルト)、「山岳の植物と動物」(ビーベリター)の自然編四章のあとに、「山岳の自然災害」(前出)、「山岳の生活と文化」(「山岳の開発」の人間生活と関わりのある三章がつづく。後二章は上記数名の合筆で、中には「絵画の中の山々」(クライネベルク)の節も加えられている。

翻訳、校訂者はドイツ文学者と自然科学者十二名から成り、本会会員の岡沢祐吉、小野有五、中村純二、宮下啓三、山崎安治、若林隆三の各氏が参加している。この出版は本会メンバーによって推進された文化活動と言っても差支えなからう。「山に登り、山の書物を読み、山を考える」登山愛好家や岳人にとって、山の基本的知識を得る格好の書物と言える。山の自然と人との関わりを多角的にとらえる書物が、少しずつでも出版される最近の傾向と照らして、本書の刊行は注目してよいのだと思う。副題の「図説百科」に示されるような、多角的総合的なアプローチは、既刊本としては「世界山岳百科辞典」(山と溪谷社、一九七一年刊)、拙著「自然の博物誌(山)」(日本放送出版協会、一九七九年刊)ぐらいである。

本書はこの種のものとしては現在望める最高水準にあると考えられ、日本人の手に成るこうした山岳の書物の実現を、近い将来に期待したいものである。A4変形判、三〇四ページ、昭和五十六年四月、大修館書店刊 定価一万八千円 (式 正英)

公開講座(32)

山

著者代表 向坊 隆

本書は山を共通のテーマとして、東京大学公開講座で行われた十の講演内容を集めたものである。本会会員でもある中村純二氏の「日本におけるアルピニズム」を除けば、登山という観点から山を扱ったものは一つもなく、残りはすべて自然としての山、あるいは精神文化、物質文化と山とのかかわりを論じている。単に登山の対象として片

行よりの日本酒とツマミ。何しろ酒蔵とニックネームのお方がいるから薬湯には事欠かぬ？ 折井前副会長、網倉、沼倉氏の甘党組もしるこのお碗をお替り。関口氏は酩酊か。

帰り際に上条輝夫氏の地元安曇節でお開き、彼は車がガス欠で雨の中を徒歩で帰る。例年より早く就寝。

十三日七時には殆んどが朝食を済ませ各班目的の山登りに出発。折井氏は数人と穂高へ。例により山研前で記念撮影。

(宇津力雄)

・一九八一・不運の

グリンデルワルト

富田 健一

私は去る七月グリンデルワルトとツェルマットに十日余りの旅行予定をたてたが、思わぬ事故でやむなく出発直前全てをキャンセルする破目になった。

多少くさっていったところへ、七月末地元のK老から手紙がきた。それによると私の行動予定日だった十六日から二十一日まで向うでは毎日天候が悪く、山々に冷雨や降雪があり、二十二日やっと陽光をうけた、という私の逸機を慰めてくれる便りであった。一方そのためにせつなく山に放した牛たちを牧舎につれ戻す労作に追われた

知床余情

秋山幹夫

霧とんで花野の上に羅臼岳日盛りを行けり露の葉頭にのせて海霧を衝き翔びたつ岩の尾白鷺緑蔭に山の湯あふれ蛇の衣けづらせて雪溪すべる蝦夷風露岩壁に霧のおだまきしがみつく風いでて岩ひげの鈴鳴らしすぐ

り、大切なまぐさを駄目にされた牧場主や農家の困惑の様子が書かれてあった。

ちようどそのころ日本の新聞にも、ヨーロッパは二十年振りの寒波に襲われ、スイスでは夏の大雪で交通がとまり、山間部の峠はみな閉鎖されたと伝えていた。こうして直接現地から状況をきくと、気の毒さに心が重くて返事を書く手にもぶった。私は昨年一昨年と何れも七月に出かけ、それぞれ一日だけ雨または雪にあって以外は連日快晴に恵まれただけに、このような不運な夏のしらせをきくのは誠に辛かった。

八月、洞沢に行き、ノロノロ15号台風に出あって穂高にも登らず山研においてきてしまった私は、K老に日本の山の様子を知らせ少しでも気晴ししてもらおうと思い、日本アルプスの絵ハガキ集を送る

付けられてしまふどころか、むしろ他の様々な分野から異なった角度で眺められるというところに、山という存在のもつ裾野の広さ、懐の深さがあると言えよう。

確かに、山というものは一人の人間が一生を打込んでなお足りないだけの奥行きをもつのである。山に何を求めるかは人によって異なるであらう。しかし何を求めても山はその人を裏切らない、というのが本書を一読して感じる印象である。何も学問というような大げさなことを考えなくてもよい。山について知ろうとすればするだけ、人は深くなり得るのである。それは山を登ろうとするとき、より高く登ればそれだけ視界が広がるのと同じことかもしれない。

私が最も興味深く読んだのはペトラルカ、ゲーテ、李白、杜甫を取り上げ、ヨーロッパと中国文学における山のとらえ方を比較した上で、万葉・新古今にみられる日本人の山の接し方を論じた西本晃二氏の「山と文学」と、塩田敏志氏の「山と風景」であった。国によってなぜ山のとらえ方が違うのかという問題を考えるためには、「山と風景」で提起されているような、空間の把握に対する風土の影響といったものが、さらに深く追究される必要があるに違いない。

たとえば日本の風土を考えると、山に伊佐夫氏の「山と災害と森林」で述べられているように、水田の水資源としての山、というとらえ方を無視することはできないであらうし、柳川啓一氏の「日本における山岳宗教」に述べられているような、カミや妖怪・死者の場としての山、あるいは庵の場所としての山の認識も、日本人と山との関係を考える上では見逃せない意識構造であらう。

他にも荒牧重雄氏の「火山」、木村龍治氏の「山と気象」、鈴木継美氏の「高地に対する人間の適応」、寺田和夫氏の「アンドス山の古代文化」、山口梅太郎氏の「山と鉱山」といったそれぞれに興味をそそる講演内容が収められているが、紙幅の関係で紹介できないのが残念である。

山水無尽蔵とはよく言ったもので、中村氏が述べておられるように、その気になれば無尽蔵にコースや登山方法をとることができるという点でも、山はわれわれの無限の探究を受けとめてくれる存在であらう。山をそうした存在と考える人々に対して、本書はすぐれた道案内の役割を果たすに違いない。

一九八一年三月二十五日発行
二八三ページ 東京大学出版
会定価千二百円

(小野有五)

アッシュの杖

伊藤弥十郎著

本書は日本山岳会福島支部創設者で、初代支部長だった故伊藤弥十郎氏の登山譜に、故人と親交のあった額田敏(故人)、後藤幹次、成瀬岩雄、二階堂哲三、平野長英ほか六氏の追想文をまじえた追悼誌である。

この種のもとはとくく湿っぽくなり勝ちだが、本書はまったく淡々としていて、快く読める。伊藤さん晩年のおだやかな茫洋とした風貌を彷彿させる。故人はその業績により内閣総理大臣賞、厚生大臣賞、文部大臣賞を受け、福島県からも表彰されているが、本書はことさらにそれに触れず、わずかに巻末に付された二頁の略歴(一九〇三—一九七七年)の中で簡単に述べてある。これは山人の追悼書として、極めて好感がもてる。

後藤氏の「大正十四年秋、燧岳の登山道、下山の途中で彼が初雪の頂上を目ざし」や、額田氏の「大正十五年秋、燧岳に登って長蔵小屋に帰ってくる」と、実にでっかい荷物を背負って一人の青年がやってきた。頑丈な体格に、どこか純情な」といった文に、若かりし頃の伊藤さんが偲ばれ、以後、吾妻はもちろ

ん、北アルプス、尾瀬、甲斐

ことにした。九月の末、礼の手紙がきたが、それにはまたも八月に、グリーンデルワルトが百余年ぶりの災害に会ったことがしたためられてあり、再度びっくりしてしまつた。一八七〇年八月、アイガー北壁に連日豪雨がふり続き、グリーンデルワルトに流れこむ溪流（K老はこれを Bad River と書いてきている）が溢れ、村を横断、西に流れている Waage Luechne にどつと流入した。村の台地は溢れ出した土砂、石塊でおおわれたこ

報告

岐阜支部設立

十周年記念

御岳山登山記

岐阜支部は今から十年前、当時岐阜大学の学長だった今西錦司先生の発案で発足した。そして今年この十年を記念して、さる十月十日、十一日、爆発の記憶も新しい御岳山で記念山行を行なった。

この日、全国からお集まり頂いた諸兄姉四十七名、西ドイツからの女性を加えての盛況ぶりだった。霧水で山肌を白く化粧していた摩利支天山や継子岳がアーベント・ロートに染まる頃、宿舎の「嶽乃湯」では大宴会が始まった。お国自慢や某女史のピンク・レディの狂宴に参加者一同、大よろこび。明日は未明の出発だというのに、街の徳利にくらべると倍も入

とがあつたらしい。それと全く同じ事態が百十年後のこの八月十六、十七日に発生した由で、七月の冷夏につづいてまたこんな災害が訪れたとは、何と悪い年であつたことか。日本とは特に縁の深い村のことだけに人ごとでない思いがした。K老も自分の家の庭（かなりの広さ）を清掃するのに一人息子と二人で二週間を費していたが完了せず疲れて中休みしているとの便り。慰める言葉のない天災であつた。

大徳利のせい、酔う程に、歌う程に秋の夜長も短く、宴は深更にまでおよんだ次第である。

十月十一日 午前四時起床、四時三十分、高橋達雄リーダーを先頭に、暗夜の中を出発。頭上には星がまたたき、南の空にはオリオンが今日の好天を告げている。全員防寒具を身につけているが、少々寒い。ラテルネの明りをたよりに黙々と進む。

御岳山は信仰の山であり、その山麓は木曾五木の茂る山である。登山道の大部分は、信者の歩行を助けるために、木を割って棧道とされている。ところが、この寒さで棧道の上には真白に霜が降りて、これが滑剤となつて足をとられて誠に覚束ない。

午前六時、朝食。この頃になると、なになんでも頂上だという頑張り組、まあ行けたら行こうと

駒、ハツ、東北朝日、銀山平など同行を共にした人の数々の山行が記されている。

成瀬氏がよく出かけた青木小屋の日記帳で、その名を伊藤さんがよく目にしながら、五十年後両者が初対面しているのも面白い。二階堂、平野両氏のものは、山宿小屋のあるじとしての、故人への親しみを語っている。（なお額田氏の本文は、同氏の遺稿となつた）

「あとがき」によれば、伊藤さん自身で入山日数を数えたらしい表があり、五十五年間、一三二九日と計算されているのだが、もつとあるのではないか、とも思われるがどうだろうか。

登山譜は、一九二二年から始まつていて、行動には詳細な時間記録が付いているが、時間はたとえば正午ならば12・00と表示されているので、目に捉えやすい。

伊藤さんは、地元の吾妻山群には、恐らく数百回登られたであろう。そうした登山譜だけに、一気に読もうとすれば單調さを感じるのはすが、適当な合間に追想の文とその折々の写真数葉を挿入して、気分の転換に留意してある。

写真には交わりのあつた人たちが登場している。巻頭のパイプを持った故人の写真、巻末の

正月風景らしい昭和三十三年一月の銚子を前にした夫人との写真、なかなか和やかである。

装幀は黒い布表紙、アッシュの杖・伊藤弥十郎、の題字は横有恒氏筆、文字は銀色で押してある。すっきりした出来栄えといえる。

A5判一八二頁 日本山岳会福島支部編 昭和五十五年十二月二十日 同支部刊

（川崎精雄）

ヒマラヤの賦

吉沢一郎

河西俊郎著

田村宣紀

このところ数年、私は日本の海外登山隊関係の本を、ほとんど読んでいない。特別に理由がある訳ではないが、何となく手にしなくなつてしまったのだ。

このような次第で、この本も持っていないし、読んでもいない。この欄に書くために借りて読んだ始末である。

三人それぞれの山を三様に書いて一冊にした本で、さりとて読むことが出来る。

全頁の約半分は、十七年前のギヤチュン・カン登山の良き時代を吉沢一郎が達者な筆で面白く書きあげている。河西俊郎は八年前のバインター・ブラック登山を、妻子持ちの目で住民の生活を書いて

いる。田村宣紀は、この本の中では一番新しい三年前の日本・イラン合同マナスル登山を、隊長という立場からの喜び、苦しみを書いている。河西俊郎のバインター・ブラックの章にいくつかの誤りがあるが、この地域に関心のある読者なら容易に判断出来ることなので、いちいちあげないが、改版の折には訂正されることが望ましい。

三人は現地語を使えず、英語も堪能という程ではないのに、目だけでよくこれだけのことを書きあげたものだと感心する一方で、現地語という耳を持ったら一体どういことが書かれるのだろうか、一寸想像もつかない。

それにしても、私としては久々に手にしたヒマラヤが書かれた本ではあったが、「記憶」に残るという感じがしない。私の偏見かもしれない。他の読者はまた別の感じを持つであろう。（敬称略）

（堀内章雄）

会費未納の方は
お早く納入願ひ
ます 事務局

図書紹介

いう倭倭組、山はマイ・ペースとのんびり探勝組と三分された。何しろ今、山はシーズン・オフ。帰りのバスが午後二時発しかない。したがって五の池を午前八時三十分までに通過しないと、頂上は諦めていただくという仕組みになっている。

樹林帯を抜けて飛騨頂上。ここまで来ると、夜は明けはなれ、四囲の大展望がひろがる。中央アルプスと南アルプスが重なり、その向こうに富士山が頭をのぞかせている。乗鞍にはまだ雪がきていないが、槍、穂高は白く光っている。ここから頂上までつらい登りだった。

風は冷たく、吹きあげられるようにして頂上へ向かって登りつづける。そして遂に山頂。万才三唱。山の西側からは数カ所、水蒸気を吹き上げている。頂上付近には、大爆発の際の火山灰で、今なお覆われていた。

しかし今日はまた、なんという好天氣に恵まれたことだろう。そういえば先程、五の池の小屋の主人が、夏以来の好い天気だといっていた。大展望を満喫して、下山にかかる。どの顔にも、疲れてはいるが満ち足りた様子がうかがえる。そして再び濁河温泉へと下った。

(江馬論)

熊本支部

秋季例会報告

九州では祖母山系、五家荘、椎葉山地など紅葉期に人の多い地域をさけて、今年は十月十七、十八日の両日熊本宮崎県境の向坂山(一六八四)と白岩山(一六二〇)で秋の例会を行った。参加者十四名、宮崎県五ヶ瀬町波島の民宿「美山」に一泊、その夜は名産やまめ料理に「ときぎ焼酎」といった郷土料理に舌鼓を打ち、翌十八日は心配された天候もどうにか降らずに白岩峠から向坂山、そして再び白岩峠から白岩山を経て三角点のある水飲の頭(一六四六)へと落葉の山路を踏みしめた。山は紅葉最盛期には一週間ほど早かったが、山頂一帯は見頃であった。この山は九州背梁山地の北端に位置し、近く指定される九州中央山地国定公園の区域に含まれており、この日もそうであったが、人があまり入らない静かな山である。地元では山頂近くにスキー場建設の計画があるように聞いたが、静かなこの山が自然環境の破壊へつながらないように切に願いたいものである。

参加者 奥野正亥、西沢健一、馬場猛、石井久夫、本田誠也、佐藤光俊、大木野徳敏、工藤文昭、和仁古昇、松本莞爾、前田辰男、本田俊子、馬場千代子、大木野まつ子

キノコ狩り山行

集会委員会

十月三日、鈴ヶ森山頂は雨。時折霰も交えて、磐越国境の山は少々手荒い持て成しぶりでした。台風22号が去って、日本全国秋晴れという期待の下に、二日深夜新宿を立ったのですが、案に相違して東北自動車道の途中から雨となり、結局それが三日いっぱい続いてしまった訳です。

三日早朝麒麟山温泉着。数時間の休息の後、林道をマイクロパスに揺られて鈴ヶ森山へ。林道から山頂へと厚いブッシュを縫って続く路跡は、ともすれば見失いかねない細々としたものでした。天候のせいか、山は初秋というより晩秋から初冬の雰囲気、氷雨に濡れる色付いた木々の姿には、長い冬を待つ一種の壮絶さが感じられました。

その夜は藤島先生もお迎えして佐藤一郎氏のお宅で懇親会。一同楽しく酔い痴れたことでした。翌四日、次第に晴れ上がっていく空に心を弾ませながら、鉾ヶ沢からシジミ沢のスラブを登って御前ヶ遊窟へ。

他の方々の代弁をさせていただけば、「草鞋のフリクションがよく効いて、まことに快適な登攀」ということになるでしょう。しかし、数年前ある沢で頭を強打して以来、とみに高所恐怖症の募っ

ている私には、まったく身の細る思いでした。青空を貫く源頭の岩峰群、兩岸の岩肌を彩る木々、そして後方遙か白雪を頂く飯豊連峰など、どれも素晴らしい景観だったので、心は宙に飛んでしまっていた私には、残念ながら何の記憶も残っておりません。

しかし、滅多に登る機会のない素敵な山に登れたことで、皆さん本当に満足の様子でした。二日間におわたり、文字通りおんぶにだっこのお世話をして下さった、越後支部ほか地元山岳会の方々には、心からお礼を申し上げます。

なお、この二日間を通じて目にしたキノコは、ツキヨタケ、ブナハリタケ、ヒメキクラゲ、ヌメリツバタケモドキ(以上鈴ヶ森山周辺)、ナラタケ、スギヒラタケ、アマタケ、シロキクラゲ、ニガクリタケ、ドクベニタケ(以上鉾ヶ沢周辺)、その他名も知らぬ種類の幾つかでした。

(上野英世)

参加者 順不同 藤島、斎藤(金)井口、高橋(金)、倉島、山田、若槻、谷中、遠藤(金)、加藤、斎藤(金)、大江、高橋(金)、立川、杉原早川、小林(金)、小関、藤井、若月、赤沢、平田、北村、矢田目、牧野、小椋、佐竹、五十嵐、ほか地元山岳会の方々。以上越後支部、山崎、菅見、林、上野、平柳、小原、増田、宅間、遠藤(金)、中島、小林(金)、堀川、中村、荒野、祖父川、中垣、船木、山田、斎藤(金)

自然・登山・探検—山岳講演集—

日本山岳会岐阜支部が設立10周年を記念して出版した山岳講演集。若干の残部を生じたので会員諸兄姉に頒布いたします。

〔内容〕日本山岳会岐阜支部の設立を祝う(三田幸夫) 岐阜の山と私(今西錦司) ヤルン・カン登頂に寄せて(今西錦司) ヤルン・カン登頂報告(樋口明生) 登山における危険について(川喜田二郎) チベット潜行の八年(西川一三) 冒険と人生(西堀栄三郎) 山と人生(吉沢一郎) 山と人——一つの自然観——(和崎洋一) 登山と科学(渡辺兵力)

B 6版、214ページ、限定500部出版、定価1,300円、送料200円、現金書留または振替で御送金下さい。

申込先 〒503-13 岐阜県養老郡養老町中 高木泰夫方 日本山岳会岐阜支部宛 振替番号 名古屋1-16218

中川、村木、中沢、宮本、小池、
継松、熊谷。

なお、現地に於て参加された、越
後支部 立川重衛会員が、十月七
日、急逝されました。慎んで、ご
冥福をお祈りいたします。

慣例のビールパーティ

婦人懇談会

九月四日は係が望んでいたよう
な？ 残暑でした。お蔭様で大勢
の参加を得てビールの売れ行きは
上々、大盛況に納めることができ
ました。ご協力ありがとうございました。

例年のように婦人部が朝から仕
度をした手料理に、遠征仕込みの
印度料理まで加わって独特の山岳
会メニューができがりました。
お味のほどはいかがでしたか？

(松永康子)

参加者 浜野正男、斎藤健治、関
口周也、網蔵志朗、高田真哉、高
沢英雄、平野勲、山崎健、渡辺兵
力、小塩丘平、木村勝久、鶴岡元
之助、山崎金次郎、山崎安治、入
沢郁夫、大塚博美、久保孝一郎、
和田民子、進藤波男、草野延孝、
田村俊介、鴨原啓佑、田口二郎、
砂田定夫、鈴木正俊、平井忠兵衛
小林太刀夫、近藤緑、山村正光、
篠原健夫、今井田研二郎、坂本正
智、沼倉寛二郎、金坂一郎、堀川
清、小倉薫子、中川武、杉山都子
高橋美津栄、今村正二、増田洋子
荒野康子、勝田房治、宮下秀樹、

前田文彦、菅原広男、林邦明、山
崎郁郎、長嶋正浩、菅野弘章、宅
間清子、平柳一郎、宮恭一、西村
政晃、高橋聡、三宅清子、各務良
幸、織内信彦、近藤信行、黒石恒
岩堀瑞子、小林由美子、小野利次
高田正男、平井拓雄、谷村吉隆、
黒沢通子、北村節子、渡辺紀子、
片山全平、田村扇一、大倉昌身、
山口節子、富田由紀子、高本信子
市村洋子、佐藤知恵子、小倉由美
子、田中清子、富田友人、早川瑞
璃子、早川理奈子、松永康子
(以上八十三名)

第十四回図書交換会

図書委員会

恒例の秋の行事の一つ図書交換
会が十月二十四日(土)の午後二
時から、四十余名の来会を得てJ
ACルームで開かれた。今年は後
に記した通りの会員から五六点
の出品があった。

希望者重複本については例年通
り塗着による抽籤を行なった。最
も競争率の高かったのは「日本ア
ルプス山人伝」安川茂雄著の十倍
だった。次いで「此の糧」尾崎喜
八署名入りの九倍に人気集中し
た。入札本では、ジャバルの「一
登山家の思い出」が底値一万円に
対し一万五千元で、根山正雄編
「銀嶺に輝く」が一万五千元、板
倉勝著「山と雪の日記」が六千
五百円、田部重治著「日本アルプ
スと秩父巡礼」が五千元でそれぞ

追悼

大木さんを憶う

六十四年目におたがいに名の
りあい、親しくしていただいた
大木さんは遂にあの世の人とな
ってしまわれた。万感胸に迫る
ものがある。

今からかぞえて足かけ四年前の
ことだが、まだ聞いたことのない
大木さんから突然電話がかか
って来た。そのおはなしは大体
次のようなことである。「山」
に君が書いた文によると、君が
前穂に登ったとき、一高生の一
行とあとになり、先になりした
ことが書いてあるが、その一高
生の一行のうちに自分がいたし
山頂で自分がうつした写真には
中学生が三人うつっている。君
がその三人の中学生のうちのひ
とりだと思いが、どうかという
おはなしであった。そのとき初
めて大木さんのご姓名をうけた
まわったのである。日を経ずし
て山岳会のルームでお眼にかか
り、写真を見せて頂いたが、ま
さにそれは中学生たる私たち三
人である。詳細は「山」三九四
号の拙文を見て頂きたい。

それ以後再三ならずお眼にか
かって思い出ばなしを取りかわ
したが、お眼にかかるたびに、
大木さんの魅力にひきつけられ
た。私は大木さんの公的生活に

関しては全く無知であったし、今
でもわずかな知識を持っているに
過ぎないが、そんなことをまっ
く度外視して大木さんに引きつけ
られた。私は大木さんよりわず
か三、四年年少であるが生来公的
生活が好きで、自分の好きな道を歩
いて来ただけで、おとなになり切
っていない。それだけにほんとう
に大成したおとなを大木さんに見
出した。ほんとうに練れた人とは
こんな人なのかと痛感し、今さら
自分の幼稚さを恥じた。せつなく
お近づきを得たのにその後病床に
就かれ、お眼にかかることもかな
わなかったが、八十八歳のお祝い
の末席を汚すの榮を得たのは幸
であった。しかしその後またもや
病褥に就かれた。そして今回の計
に接したのである。

はなしはわかるが、大木さんは
一高山岳会(旅行部の前身)の創
設者であられたそうだが、そのひ
そみに做ってということになるか
も知れないが、私は七高の山岳部
の創設者のひとりである。別に一
高で旅行部がつくられたとの情報
を得て、七高でもつくろうとした
わけではない。それだけにそこに
冥合がある。この時すでに摂理が
はたらいて、後に親しくしていた
だく因となったような気がしない

でもない。それでこそお互いに
知らないでいっしょに前穂に登
り、大木さんの乾板に姿をうつ
すことになったのではなからう
か。

大木さんの追悼文を「山」に
書く適任者は他にも大勢おられ
るはずだが、大抵世を去ってお
られる旨、理事の中村さんから
承り、たった一度だけ大木さん
と一緒に登山した私であるが、
それでは、という気持ちになった
ものである。この拙文を書いて
いる私はもう二カ月で八十六歳
になる。大木さんと六十四年目
に名のり合ったときの大木さん
のご年齢になる。このようなこ
とを思えば思うほど、大木さん
がなつかしくなりまされる。感慨
無量である。今となってはただ
ひたすら故人の霊の安らかなる
を願ってやまない。

終りに大木さんたちといっし
よに前穂に登った私たちの一行
のうちのひとり、神田積次郎君
が大木さんの計に接して寄せて
来た句をご紹介します。

○土用晴れ富士、立山も指呼の
うち

○夏山の写真の主逝く卒爾にて
昭和五十六年十月十三日
(辻 莊一)

れ落札した。

なお、ヒマラヤンジャーナルなど図書交換会用の図書の一部を地方会員対象として販売いたします。詳しくは後日会報にてお知らせいたします。

(大橋 晋)

三田幸夫、岩瀬昭祐、矢田城太郎、橋爪幸達、山崎安治、村井米子、泉久恵、宮下啓三、中村小一郎、砂田定夫、吉田理一、織内信彦、村松紀夫、越田和男、川崎精雄、大橋晋、島田興、織田沢美知子、和田誠一、坂本正智、鳴原啓佑、飯島齊、滝川清、篠繁市、松家晋、坂倉登喜子、中川恵實、金坂一郎、江越千代子、伊藤博夫、岡沢祐吉、千葉保之、加藤隆

会務報告

11月理事会

11月9日午後6時30分
本会 ルーム

出席者 佐々会長、渡辺、田口副会長、小倉、高木、川上、水野、菅沢、西村、中村、赤松、伊丹、河村、松家、岡沢、大倉各理事、鳴原、太田各監事、小原、佐藤、大塚、松丸各評議員

(委任・欠席) 村木評議員、神崎高橋、田村、鈴木各理事

◎審議事項

▽年次晩餐会について(伊丹)、晩餐会を会員のより楽しい集いにする目的で今年は多少趣向をこら

す準備をしている。了承

▽ルーム購入に伴う長期借入金金の臨時返済について(西村)、前回の理事会のあと計数的情報をかためて原案を作成した。理事会でいろいろと検討の結果、財務に明るい会員の意見もきき、次回理事会まで財務担当で検討を継続して承。▽図書出版研究基金の使途運用の再確認とその手続きについて(渡辺)、前回理事会で未処理にしたこの件につき、総務委員会原案の線に沿って五人委員会も了承、基金運用は理事会の承認事項とした。▽日本山岳会の英文名改訂について(海外委員会)、現行のジャパニーズをジャパンに改訂してはどうか。この件は定款変更にもなるので、なお慎重に検討すること、了承。

◎報告事項(各委員会)

総務委員会 会員懇談会を毎月十五日に確実に実施する。委員長会議を十一月二十六日に開く。岐阜東海支部の集いに本部役員出席。海外委 海外の定期刊行物の主要記事の紹介を「会報」にのせる。婦人懇 忘年会十二月十八日、ルーム。その他 指導、高所、学生青懇各委員会で行事予定を報告。その他委員会には特に報告事項はない。

昭和五十六年度

第一回評議員会

11月6日午後6時
本会 ルーム

「この本展」の開催について

年次晩餐会併設を慣例として毎年開催していたこの「本展」を、本年度は、晩餐会開始までの短時間でしか見られない不便を解消することを主眼に、「山岳図書を語る集い」に併設することに致しました。

例年以上に充実した催しとしたいと考えていますので、左記の通り奮ってご出品下さるようお願い致します。

記

一、開催日は昭和57年2月20日(土)午後2時より(当日、吉沢一郎氏の「アメリカの本を語る」が併せて催されます)。
一、出品物は、山に関する珍本・稀本・署名本などで、この一本と思われるものなら何でも結構です。
一、出品物には、それぞれ簡単な解説原稿を添付して戴きます。(四百字詰原稿用紙二枚以内) 原稿には、書名・著者

名・発行所および発行年月日を明記下さい。

一、展示方法は、原則として当日出品物を直接ルームに持参して頂き解説原稿と共に展示し、閉会後お持ち帰り頂きます。(事前持込み、後日引取りも、ご相談に応じます)

一、解説原稿は、1月20日までに図書委員会宛お送り下さい。

(図書委員会)

高所登山研究会のご案内

ご案内

一日時 昭和57年2月6日(土)午後3時30分〜6時

二場所 山岳会ルーム

三発表形式 パネルディスカッション

四内容 テーマ(1)高所における生理的反応や障害の克服(準備と実際)について

(2)山で遭遇した雪崩(日時・天候・形・規模など)について

五報告(テーマにそって問題提起)

村木、飯野各評議員

議長 松丸秀夫評議員

議題 昭和五十六年度、本会名譽会員推薦の件

定款第六條第五項および推薦内規にしたがって推薦を行った。その結果、会員番号一二五七加藤泰安、一六四一佐藤テルの両会員を推薦することに決定した。

◎会務報告

渡辺副会長(1)委員会会議の結果、(2)理事会運営の改変、(3)上半期会計監査結果

(起)

司会 雨宮 節氏

(1)山学同志会隊一九八〇年春カンチェンジュンガ峰八五九八北壁より登頂 報告者 川村晴一氏 坂下直枝氏 坂野俊孝氏

(2)高山研究会隊一九八一年春ダウラギリ峰一六七北東稜より単独登頂 報告者 禰 博信氏

外に講師団として、金坂一郎氏(雪崩)、中島道郎氏(高所医学)、田中壮信氏(高所医学)を予定しております。

六 申し込み 研究会運営上、参加人数を把握したいので、希望者は昭和57年1月20日まで、山岳会事務局まで連絡してください。また内容について、意見、希望がありましたら、高所登山委員会担当理事川上隆宛にお願いします。

この研究会を実りあるものにするために、多数の参加と活発な意見、質問をだしてください。

(高所登山委員会)

大修館書店

《最新刊!!》



遙かなり

エヴエレスト

——マロリー追想——

島田 巽著

G・L・マロリーがエヴエレストに消えて六十年……。よき師友にめぐまれ、文学・芸術を愛し、教育や社会改良の理想に燃えた青年が、他方て山に開眼し、未知なる高峰へと歩み出す。その果敢な人間像を美事に浮彫りにした本邦初の評伝。四六判・仏装・10ボ組 定価一、五〇〇円（すいせんします）

●美事な一大叙事詩!!

80年チヨモランマ登山隊隊長 西堀栄三郎

図説百科

山岳の世界

N・ディレンファース／T・ヒーペラー他著
日本語版監修 西堀栄三郎・宮下啓三●山の自然と文化のすべてを語る山岳
ワイド百科!!

B5変型版・図版600枚 定価一八、〇〇〇円

小島鳥水全集

■第9回配本

全13巻・別巻1

第11巻 (57年1月中旬刊)

〒101東京都千代田区神田錦町3-24振替/東京9-40504電話294・2221<大代表>

塚原道夫↓三辺夏雄へ

物故

五〇五四 立川 重衛

四七五一 武藤 晃

図図図

スキー

現地集會

集會委員會

日時 昭和57年1月15日(金)より

1月17日(日)まで

場所 八方尾根、中央大学山荘

(現地集會、現地解散)

会費 一万二千元(会員外一万四千元、子供八千円)

編集後記 前号会報の「古いピッケルのことなど」の筆者平柳氏より、文中「アンデルマッテン」とあるのは「ANDENMATTEN」であると訂正がありました。するとアルマゲルとあるのは地名で、現在のザースアルマゲル、一九二七年のベデカにあるザース谷のALMAGELL村ではないかと思われませんが如何でしょうか。(編集)

昭和五十六年十二月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五十四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 佐々保雄

編集代表 岡沢祐吉

電話東京(03)四四三三

振替口座東京三一四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂